

NIEフォーラム

NEWSPAPER IN EDUCATION

2023 第2号

目次

実践報告

- 学校・行政・新聞社の協働による NIE の実践
—北海道「別海町 新聞の日」に着目して— …… 池田 泰弘・中井 理依 1
- 他者に伝えることを意識した新聞の見出し付けの実践記録 …… 伊吹侑希子 9

会員報告

- 探究と対話を深める NIE
—NIE 全国大会京都大会に向けて— …… 橋本 祥夫 15
- 日本 NIE 学会『NIE フォーラム』投稿規約 …… 20

学校・行政・新聞社の協働によるNIEの実践

—北海道「別海町 新聞の日」に着目して—

Practicing NIE through Cooperation between Schools, Administration, and Newspaper Company
—Focusing on “Betsukai Town Newspaper Day” in Hokkaido—

池田 泰弘
Yasuhiro IKEDA
(弘前大学)

中井 理依
Rie NAKAI
(北海道新聞社みらい教育推進室)

1 本報告の背景と目的

現在の学校教育では、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、各学校が地域の実情や児童生徒の実態に応じて目指すべき教育の在り方を家庭や地域と共有し、相互の連携及び協働のもとに教育活動を充実させていくことが求められている¹⁾。

また、教育課程の編成において教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成が求められた。その一つである情報活用能力の育成に向けて、新聞教材の適切な活用が明記されており、具現化には人的又は物的な体制の整備が必要となっている。

今まで各学校・各教師における個別のNIE実践は蓄積されてきたが、学校・新聞社・地域が協働でNIE実践を進めた事例は僅少である²⁾。特に北海道は広大な土地面積を有しているため全国で最も市町村数が多く、全国の約10分の1を占めている³⁾。北海道特有の都市構造を背景に⁴⁾、新聞活用の実践者・指導者の確保がNIEの普及や実践の浸透に向けた一つの課題となっている⁵⁾。

こうした中、2020年に北海道別海町では「別海町 新聞の日」をスタートさせた。地域が未来を担う子どもたちに「学びの土台」を築き、地域における人材育成の手立ての一つとして、NIEが採用された点は注目すべきである。

本報告は、北海道「別海町 新聞の日」の推進と展開について述べる⁶⁾。第一に、地域としてNIEを推進した別海町教育委員会の取り組みを報告する。第二に、学校現場での実践事例を報告する。第三

に、北海道新聞社の取り組みについて報告する。最後に、本実践のまとめと今後の方向性を示す。

2 別海町教育委員会の取り組み

(1) NIEの運用に向けて

①別海町の教育について

北海道の東部、根室管内の中央部に位置する別海町は大平原が広がる自然豊かな町である。令和5年度の教育行政執行方針には3つの基本姿勢と5つの主要施策が述べられており、その中で地域・学校・家庭・行政が一体となって「ふるさとべつかい」を担う子どもたちの資質・能力を育む取り組みを進める必要性と決意が示されている⁷⁾。

別海町において次世代を担う人材を育成するために、チームとして学校教育を展開するとともに、生涯にわたる学びの基礎を構築していく教育環境の整備が推進されていると言える。

②NIE推進の動き

別海町では、NIEを取り入れる計画的な取り組みがなされていたと考えられる。表1は「別海町 新聞の日」の制定までの取り組みを整理したものである。2017年度は萌芽期と位置づけ、言語能力の育成をめざして言葉に着目する時間を確保した。これは学びの土壌を形成するための取り組みであり、現行学習指導要領の実施に向けた先行的な取り組みであったと理解できる。2018年度はNIE元年と位置づけ、全小中学校に新聞閲覧用の架構を設置するとともに、全国紙でサポート体

表1 「別海町 新聞の日」制定に向けた動き

年度/位置づけ	具体的内容	取組概念
2017 NIE萌芽期	NIEと読書活動の推進	学びの土壌形成
2018 NIE元年	全校に新聞架台の設置と読売新聞の購読開始	新聞活用環境の整備
2019 NIE2年目	小学校で子ども新聞、中学校で中高生新聞を配布(購読中の読売新聞を使用)	学校種に応じた個別化
2020 NIE3年目	「別海町新聞の日」制定 北海道新聞(購読紙)を全児童生徒に配布	学びの土台形成

(根本渉氏提供の資料を参考に池田が作成)

制が充実している読売新聞の購読を開始した。これは新聞を活用する教育の実践に向けたスタートアップであり、新聞に慣れるための雰囲気づくりに寄与するものであったと理解できる。2019年度はNIE2年目と位置づけ、小学校と中学校にそれぞれ適応する新聞(いずれも購読中の読売新聞)を選択した。それは使いやすさや活用の可能性を探るための手立てであり、新聞活用の個別化や柔軟性の確保を求めるものであったと理解できる。そして、2020年度の7月16日から毎月最終月曜日を「別海町 新聞の日」と制定した。NIE3年目を契機に、新たに購読する新聞として北海道新聞を採用した。その理由は、①同町子どもたちが地元紙に接する機会が少ないこと、②全国紙の読売新聞と地方紙の北海道新聞を活用することによって子どもたちの社会への窓口を拡大することである。こうして学びの土台が学校・行政・新聞社によって形成されたと理解できる。

また、別海町ではNIEの推進にあたり、実践者である教職員や小中学校の保護者に向けて理解と協力を求めた。町の広報誌や学校での文書配布を通して、わかりやすくかつ丁寧な説明を行った。

③NIE推進の目的

NIEの推進目的は「シチズン(市民)度につながる」ことである。現行学習指導要領では、新聞の適切な活用によって情報活用能力の育成が重要視されている。「確実性」「信頼性」「網羅性」という特性を持つ新聞を活用し、各校種・教科・領域において主体的・対話的で深い学びにつなげることをめざしている。NIEで深い学びに対応する

基盤を整え、社会に向き合いながら自ら考えて行動する市民的な資質・能力の育成が可能である。

(2) NIEの具体的運用

表2は別海町のNIE運用計画の一部を示したものである。例えば、月1回は朝読書の時間(15分)に新聞を配布し、全児童生徒が取り組む。

表2 別海町NIE運用計画(一部抜粋)

運用例		具体的内容
朝読書	小学生	気になる記事・写真の発見、感想文や情報整理
	中学生	記事の内容の要約、意見文の交流
ワークシート活用		ネット配信や別海町独自ワークシート

(根本渉氏提供の資料を参考に池田が作成)

その内容は校種と学年によって異なるが、一人ひとりの手元に新聞がある状態を維持できることが特徴的である。また、北海道新聞社や町内の先生方の理解と協力により、授業で使用するワークシートの作成・活用も進められている。運用のポイントはNIE自体が多忙な学校現場において重荷にならないことであり、「簡単」「短時間」「教科横断的」「どの生徒にもできる」といった実践的・教育的利点を保障していることである。

(3) NIE運用の学習原理

NIEにおいて、児童生徒はどのような学習行動を行うべきであるのかは実践上の課題である。表3はその学習行動と原理を整理したものである。これらは3つの段階があると考えられ、それぞれに呼応する学習原理が存在する。第I段階は、慣れる・めくる・探すといった初歩的な学習行動であり、その学習原理は関心や意欲である。第II段階は、読む・知る・考えるといった新聞の内容把握のための学習行動であり、その学習原理は理解と思考である。第III段階は書く・発表する・交流するといった新聞の内容展開のための学習行動であり、その学習原理は表現である。最終的には学びの土台の上に立つ学力を総合的に形成するものである。その結果、地域や社会の一員としての自

表3 NIE運用の学習原理

段階	学習行動			学習原理
	慣れる	めくる	探す	
I	慣れる	めくる	探す	関心・意欲
II	読む	知る	考える	理解・思考
III	書く	発表する	交流する	表現

(根本渉氏提供の資料を参考に池田が作成)

覚や愛着が芽生え、主体性や社会性を身につけた別海町発のシチズンを育むことになると言える。

3 学校現場での実践事例

(1) 別海町立別海中央小学校の実践

本校は別海町の中心部に位置しており、335名の児童が学んでいる。NIE実践の特色はこれからの社会を生きる子どもたちにとって不可欠な「情報活用能力」の育成をNIE学習に見出し、年間を通じて取り組みを行っていることである。

①新聞に親しむ環境づくり

資料1は、校内に設置した新聞架台(A)と掲示物(BとC)である。架台は児童の目につきやすい廊下や階段の踊り場などに設置している。毎日、複数紙を置いて比較読みができるようにするなど、日常的に子どもたちが新聞に親しみやすい環境づくりに努めている。架台と掲示は参観日などに保護者が閲覧することや来校者の目に留まることがあり、NIE活動のPRの一翼を担っている。

資料1 校内に設置した新聞架台と掲示物

A



B



C



(根本渉氏提供の資料より引用)

②NIE学習の具体

毎月1回、北海道新聞と「こども新聞 まなぶん」が配布される日を「ぶんぶんタイム」と名付け、自分が興味をもった記事を見つけ出したり、記事に書かれている内容に意見を書き表したりする活動を行っている。学習目標は「世の中の出来事に興味を持つ」、「情報を収集し選択する」、「伝えたい内容を読み取る」、「出来事に対する自分の考えをもつ」といった別海町のNIE運用計画の一部を取り入れている。資料2(AとB)は児童の学習活動の様子である。新聞を学ぶことによって、社会の一つの窓口を作ることができた。

また、本校は情報活用能力の育成に向けた年間指導計画の配列表を作成している。カリキュラムマネジメントの一環として、計画的に児童の新聞活用能力を育む手立てを明確化している。

資料2 児童の学習活動の様子

A



B



(根本渉氏提供の資料より引用)

(2) 別海町立上西春別中学校の実践

本校は別海町の西部に位置しており、83名の生徒が学んでいる。NIE実践の特色は総合的な学習の時間の中にNIE学習を位置づけ、年間を通じて学習に取り組んでいることである。

①新聞に親しむ環境づくり

新聞の日の週は「NIEウィーク」と位置づけ、配布された新聞を活用した学習を全校で取り組んでいる。下の資料3（AとB）は、校内の壁面に掲示されたNIE学習の成果物である。校舎内の各所にある壁面に授業や委員会活動の取り組み、まわしよみ新聞などを掲示している。そのため、学びの成果や工夫された活動の様子を見ることができる。可視化することにより学習成果を生徒全体で共有し、学習意欲の向上につなげている。

②NIE学習の具体

昨年度から出前講座など北海道新聞社の協力

で「まわしよみ新聞」に取り組んでいる。資料4はその様子である。講座の中では「読み方や紹介の仕方を工夫する」、「記事の配置や自分達の新聞の特徴を表すためのタイトルを考える」、「どんなコメントを記入すると良いのかを考える」時間があった。資料5（AからC）のように各グループで相談し合いながら、まわしよみ新聞を作成する姿が見られた。北海道新聞社の講師の方から、複数の記事のつながりを理解して読む様子や記事と自分の生活を結び付けて読む姿を褒めていただい

資料3 壁面に掲示した学習成果物

A



B



(別海町立上西春別中学校提供の資料より引用)

資料4 北海道新聞社による出前講座



(別海町立上西春別中学校提供の資料より引用)

資料5 出前講座における生徒の様子

A



B



C



(別海町立上西春別中学校提供の資料より引用)

た。多くの生徒が新聞の読み方がレベルアップしたと感じた。

4 北海道新聞社の取り組み

(1) 「別海町 新聞の日」実践に関わった経緯

当社は2021年、日本新聞協会主催の第26回NIE全国大会札幌大会の主管社となった。社内的に中心となって準備を進めていた企画室、NIE推進セ

ンター（当時）の担当者は全国各地のNIE先進地を視察しており、20年に秋田県横手市の教育委員会などを訪れた際、「別海町がNIEに熱心で、教育委員会の担当者が視察に来た」と伝えられた。

同町は児童生徒の読解力向上を目指し、教育方針にNIEの推進を明記し、19年度から町内の小中学校全校（小学校8校、中学校8校）でNIE推進プロジェクトを実施している。当社は同プロジェクトに協力するため、20年7月に町と「別海町新聞の日に関する協定」を締結。企画室、販売局、編集局、NIE推進センターなどが関わる体制づくりを決めた。本協定には、①北海道新聞朝刊を町内の小中学校全児童・生徒分購入する（月1回、1350部、教材単価）②町は新聞を活用した学習の時間を推進する③北海道新聞社はこの活動を充実させるための支援を行うことなどが明記された。

道内で新聞活用事業を拡大させるにはまず、子どものみならず教師にも新聞との接点が必要だという点で一致し、同月16日に「新聞の日」がスタートした。同日は当社がNIE（教育に新聞を）活動や号外発行などのために製作した多目的取材・宣伝車「ぶんぶん号」を本社から派遣し、町内の小中学校各1校の教室で児童生徒が新聞を読んでいる様子などを取材、簡易号外を作成して全員に配布した（資料6）。

資料6 「別海町 新聞の日」開始の新聞記事



2020年7月17日 北海道新聞
北海道新聞社許諾D2308-9999-0026929

(2) 別海町との協同推進

「新聞の日」がスタートした20年はコロナ禍のただ中にあり、文部科学省は小中学生に情報端末を1人1台ずつ配布する「GIGAスクール構想」

を前倒して実施していた時期と重なる。道内でも多くの学校が休校となり、オンライン授業を想定していなかった現場の中には、事実上、子どもたちが授業を受けられない事態が発生した。こうした事態を踏まえ、当社はこれまで一般企業や大学に販売していた記事データベースを、デザインを変更して小中高校向けの商品「どうしん記事データベースまなbell（べる）」（当時。現在は「総合デジタル教材 どうしん まなbell（べる）」）。以後、「まなbell」と表記）として開発した。ダウンロードして配布できる専用ワークシートや子ども向けクイズなどの機能を搭載し、翌21年春に発売した。

紙の新聞とあわせ、過去35年にわたって蓄積している当社の記事を資料として活用できるデータベースを、探究型の学習に生かしてもらいたいと同町に働きかけ、21年に契約を結んだ。

まずは教師に「まなbell」の機能及び活用法を周知するため、当社社員が同年に教師向け研修を実施、記事を活用したワークシートの作成方法などを伝えた。

また、当社社員を講師として派遣する「出前授業」を活用している学校もある。例えば、上西春別中学校は22年度に日本新聞協会のNIE実践指定校となり、さまざまな形で新聞活用を行っているが、同年秋には当社社員によるワークショップ「まわしよみ新聞」を実施。23年度はさらに地元支局の記者などを含む全3回の講師派遣依頼があり、新聞の活用だけではなく、新聞社の事業を取り入れた「新聞社の活用」「新聞記者の活用」を行い、さまざまなアプローチによるNIEを展開している。

（3）今後の展望

町内の学校の中には、さまざまな形で新聞活用が定着してきたところもある。ある小学校は、「まなbell」からダウンロードできるワークシートを印刷し、児童が気になった記事を切り抜いて添付し、感想を書いて廊下に掲示している。それを読んだ他の児童が付箋に感想を書いて張り付け、記事を介して互いに評価し合う学習活動に生かして

いる。

また当初、児童生徒への新聞配布日は毎月最終月曜日と決めていたが、その後、現場から「中学生向けの企画が掲載される曜日に配布したい」など、さまざまな要望があがるようになった。各校の実情に合わせて新聞活用が多様化していることの証左と言えよう。

一方で近年、学校教育でのメディアリテラシーの重要性が増しており、新聞社も従来の紙面に加え、デジタル版、記事データベース、他社のニュースサイトで配信される記事など、自社で持っていたり、関与していたりする複数の媒体を組み合わせたNIEを提案していく必要がある。

こうした点を踏まえて本年度、同町へ紙の新聞と記事データベースの活用、日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」や当社の子ども向け投稿欄への応募などを組み合わせ、独自の小学校向け年間カリキュラムを提案した。同町教委と協議し、別海中央小学校をモデル校として授業などで導入し、主幹教諭と内容をブラッシュアップして、いずれ町内全8小学校への導入を目指している。

別海町と、当社の本社所在地である札幌市との距離は400キロ近く。教師への研修や授業参観など、対面でできればそれに越したことはないが、現実には思うに任せない。だが新聞社も学校も、「直接会ってやりとりしてこそ、真の意味で意思の疎通が図れる」という固定観念が組織に根深く残っている点において共通しているということ、強く感じる場面がしばしばあった。慣習を見直し、コロナ禍が拓いたオンライン会議や授業などをもっと活用していけば、広い北海道で新聞社がより積極的に関与するNIE実践が可能になるのではないかと。同町との関わりでこうした可能性も切り開いていきたい（資料7）。

5 本実践のまとめと意義や今後の方向性

（1）本実践を振り返って

これまで北海道「別海町 新聞の日」の推進と展開について、別海町教育委員会ならびに北海道

資料7 別海町の取り組み経過を伝える新聞記事



2023年7月31日 北海道新聞 許諾D2308-9999-00026929

新聞社の取り組みや学校現場での実践を報告した。今までのNIE実践はどちらかと言えば、学校や新聞社が教室における授業場面を中心に行われてきた。今回は実践の前に、行政と新聞社の協定締結によってその基盤を形成するアプローチを採用した。学校現場が安心してNIE実践ができる環境を整備することは、一定の時間や手続きを要する。組織内の理解や当事者間の意思疎通、そして何よりも未来志向の意識が実現の鍵を握ったと言える。新聞を中心点として学校・行政・新聞社がいわば三角形の関係を築きつつ、児童生徒の学力向上のために同一方向でベクトルを進めることが可能になったと考えられる。

(2) 本実践の意義

本実践の意義は以下の2点に集約することができる。1点目は、学校・行政・新聞社の三者が協働を通してNIE推進の体制を構築し、NIE実践の地域密着化を図ったことである。これは、社会に開かれた教育課程や外部人材の活用など学校教育における今日的課題に対応した取り組みである。都市部とは異なる道東のへき地において、先駆的な取り組みであると言っても過言ではない。2点目は、「別海町 新聞の日」の制定に伴うNIE実践の普及により、9年間（義務教育）に渡る長期的視野に立って学力形成の視点を得たことである。児童生徒が新聞を通して社会への接点を

持つことは、地域における社会参画の意識を育む効果が期待できるだけでなく、自律的な問題解決能力の育成に結びつくと考えられる。

(3) 今後の方向性

本実践の今後の方向性として以下の2点を示す。1点目は、NIEの取り組みの長期的保障である。長年の準備によってNIEの機運が高まったことは一定の成果をもたらした。ただし、絶えず運用や実践の工夫と改善を図り、永続的なシステムの構築に努めていく必要がある。地域住民の参加や根室管内の他の市町村との交流を視野に入れ、別海町のNIEの実践情報を発信することを検討すべきである。2点目は、NIE指導者の養成と質保証である。今後、教員の人事異動や退職等に伴い町内の有能な実践者が不在になる可能性は否定できない。例えば、「NIEマイスター」（仮称）といった実践者の地位を公的に保障して人材を育成し⁸⁾、より質の高い別海町独自のNIEを発展させるための施策を講じていく必要がある⁹⁾。

本実践は北海道にある一つの町の取り組みである。筆者は今までこの地域で熱意溢れるNIE実践の先達が汗を流して心身ともに苦勞する姿を見てきた。その意味で、教育関係者や新聞社が連携を図り、地域の理解や協力が得られた上で結実したまさに協働の成果である。北海道内におけるNIE実践の一つのモデルケースとして、本実践の

波及効果を願いつつ実質的な発展を期待したい。

注

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』, pp.25-26.中学校も同様の記述がある。
- 2) 例えば, 秋田県横手市教育委員会では2016年度から学期中の毎月第3金曜日を「横手市新聞の日」としており, 読売新聞を提供している。
(<https://www.pressnet.or.jp/about/commendation/chiikikouken/2022/p02.html>, 2023年7月15日閲覧確認)
- 3) 政府統計の総合窓口(e-Stat)によれば, 2023年7月15日現在において全国の市町村数が1,724であり, そのうち北海道は185である。
- 4) 本稿における「北海道特有の都市構造」とは, 高度な都市機能を有する札幌市と札幌からの距離が長い地方都市が点在する広域分散型の構造を意味する。この点につき, 2023年1月1日北海道新聞朝刊「コロナ禍 続く札幌集中」, または2023年4月22日同新聞朝刊「縮む マチ生活守れるか」の記事を参照願いたい。
- 5) 北海道東部(道東)における教師文化の継承の困難性については以下の論考で指摘されている。
藤本将人・樋口達也・中村拓人・林祐史・細川遼太・池田泰弘・森田耕平・今野碧・細野歩「北海道東部地域における教師教育の課題とその克服(1)ー社会科授業づくりの可視化と共有ー」『北海道教育大学紀要』(教育科学編)第63巻第2号, pp.115~123, 2013.
- 6) 本報告では, 2023年度において別海町に設置されている小中学校16校(小学校8校, 中学校8校)を対象としたNIE実践を紹介する。本稿掲載の写真や新聞は対象となる学校の許可や新聞社の許諾を得ている。本稿を執筆した背景として, 第一著者である池田が2023年3月末まで北海道の公立中学校教員であり, NIEアドバイザーとして北海道新聞社とともに実践研究や推進活動を行った経緯を挙げておきたい。また, 「別海町 新聞の日」の表記は別海町における行政文書を根拠とする。
- 7) 別海町の教育行政執行方針は以下を参照。

(<https://betsukai.jp/resources/output/contents/file/release/4326/51749/R5kyouikugyouseisikkouhousinn.pdf>, 2023年7月15日閲覧確認)

- 8) 例えば, 秋田県大館市では優れた授業実践力を持つ教員を「授業マイスター」として認定する制度を整備している。各種の表彰制度や資格認定, 研究交流を通して教員のやりがいや各校での主体的な取り組みを後押しするねらいがあるという。(https://odateanabi.site/kyoiku/odatekyoiku/, 2023年7月31日閲覧確認)
- 9) NIE実践者から普及者, そして指導者への道を行行政と学校・新聞社が一体となって切り拓いていくことが望ましいと思われる。例えば, NIEアドバイザー(日本新聞協会認定)との連携や実践交流, NIE関係の研究大会への公費による参加派遣といった手立てが想定される。

※謝辞

第2章と第3章の執筆にあたり別海町立別海中央小学校長の根本渉氏(日本新聞協会認定・NIEアドバイザー)から多大な情報提供と有益な助言を頂戴した。また, 別海町立上西春別中学校から貴重な写真の提供を受けた。ここに, 関係者の皆様に対して甚大なる感謝の意を表する次第である。

他者に伝えることを意識した新聞の見出し付けの実践記録

Practical Record of Newspaper Headlining with an Awareness of Communicating with Others

伊 吹 侑希子

Yukiko IBUKI

(京都先端科学大学附属中学校高等学校)

1. はじめに

国語科における「情報」に関する学習について平成28年の中教審答申では「資質・能力を育成する学びの過程についての考え方」の中で『話すこと・聞くこと』、『書くこと』、『読むこと』のいずれの学習過程においても、『情報を編集・操作する力』、『新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力』、『新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力』を働かせ、考えを形成し深めることが特に重要⁽¹⁾と述べている。ここで示されている力を育成する方法として、古典文学作品に描かれた内容と生徒たちが持つ今までの知識や経験を関連付けて比較し相違点を整理しながら新聞記事にまとめる学習活動を設定した。新聞は取材に基づいて情報が整理・編集され、他者に読まれることを前提に書かれる媒体である。特に、新聞紙面に取り上げられた事柄について実体験を伴わない読者に的確に伝わるかどうか客観的な視点を取り入れることで、生徒のメタ認知スキルを鍛えることにつながると考えた。また新聞の見出しは、限られた字数で情報を吟味して他者に伝えたい事柄を正確に表現するとともに、情報発信者の価値判断を示す。そこで、高校二年生を対象に、富士山方面への研修旅行と関連付けて『更級日記』を題材とした授業を展開し、研修旅行後には実体験を踏まえつつ、富士山の記述のある他の古典文学作品について調べ、5W1Hを意識した見出しを

考えて新聞を制作し、同学年だけでなく他学年の生徒に発信するという学習活動を構想し実践した。

2. 実践の概要

実践は次のとおりである。

・ 単元名

富士山について描かれた古典文学作品を読み解き現代の相違点を新聞記事にまとめよう

・ 教材名

「門出」(『更級日記』)

* 富士山に関連する記述部分はプリントで提示した。

・ 単元目標

- ・ 5W1Hに着目し、新聞記事における効果的な文章構成について理解する。(知識・技能)
古典に用いられている語句の意味や用法を理解し、語彙を豊かにする。(知識・技能)
- ・ 新聞を制作するにあたり記事にどのような内容を書くか考え、複数の文章の比較や必要な情報を集め選択し、見出し・本文の文章を適切に表現する。(思考・判断・表現)
- ・ 記事に関係する場所に足を運び取材することで実社会と国語の関わりを見だし、他者との交流から自分の考えを広げたり深めたりしようとする。(主体的に学習に取り組む態度)

・単元の構成（配当 7 時間）

第一次

『更級日記』の「門出」と富士山に関連する記述内容について語句や文法事項とともに理解する。（5 時間）＊2022年10月26日から28日に富士山方面へ研修旅行を実施。

第二次

〈探究学習①・情報の収集・整理〉（1 時間）

研修旅行後、図書館にて富士山に関連する古典文学作品について調べ、新聞制作アプリ「ことまど」⁽²⁾を用いて、新聞制作の編集方針を決める。昼休み・放課後など授業時間外で新聞を完成させる。

＊授業時間外で行う学習活動は次の3点である。

- ① Google Classroom内にアップされた各グループの新聞作品を読み相互評価する。
評価のポイントとして、①見出しの工夫、②写真の選び方、③古典文学作品の比較についての着眼点、④富士山への研修旅行で見聞した事柄と古典文学作品との相違点の4点を項目として挙げた。
- ② 提出された21作品の中でもっとも評価の高かった作品のグループが再度集まり、トップ記事について5W1Hの要素を組み合わせた見出しを5パターン考える。
- ③ 朝学習の時間（朝礼後、始業前の十分間、英語や数学などの課題に取り組む時間）を用いて、研修旅行に行った高校二年生と行っていない高校一年生それぞれにトップ記事の見出しがない新聞紙面を配布し、提案された5パターンの見出しの中で、どの見出しがもっともふさわしいか投票を実施する。また、選んだ理由について簡潔なコメントを記入する。

第三次

〈探究学習②・まとめ〉（1 時間）

空白になっていた見出しについて、集計結果を確認する。他者に伝える上で、情報を吟味し取捨選択する際に外せない要素について考える。

3. 授業の実際

第一次（5 時間）

知識の定着を図るため、まず日記文学の流れについて国語便覧を用いて確認したうえで、『更級日記』の冒頭部分を読み、作品の全体像を把握した。そしてプリントを用いて富士山や富士川奇譚について書かれている箇所の内容を読解した。

第二次（1 時間）

研修旅行後、探究学習を進めるにあたり、共通するテーマに関する複数の文章から情報を取捨選択するスキルを身につけること、古典文学作品の理解を深めるうえで、作品の舞台となった場所を訪れることで実体験をとめない、現代と結びつけながら思索を深め、情報を吟味して他者に伝わる新聞を制作することがねらいであると説明した。そして、新聞制作をするにあたり、新聞の構成や写真の選び方・見出しについては5W1Hを意識してつけることを説明した。「紙」でまとめるのではなく、クラウド型新聞制作アプリ「ことまど」を用いることで、ネット環境があれば、デバイスを問わず編集できることを確認した。ICTを活用してクラウド上で、複数の人数で瞬時に情報を共有できる利点を生かし、同じ作品を読んでも、同じ景色を見ても、人の気づきは様々であるからこそ、互いの意見を出しあい共有しながら思考を深め、合意形成を図るように指示した。

第三次（1 時間）

提出された新聞作品をみると、授業で扱った『更級日記』以外の富士山にまつわる古典文学作品として、『竹取物語』や『伊勢物語』、和歌や俳句などを挙げ、その記述内容と現在の様子を比較してまとめられていた。一例として、『更級日記』と『伊勢物語』の富士山の描写について現代と照らし合わせた文章が書かれた新聞作品（図1）の一部を挙げる。『更級日記』については、「秋に訪れたのだが、すでに富士山のてっぺんには雪が積もり、山肌は青く、まさしく『更級日記』に描かれていた光景であった。『更級日記』は1000年以上も前に書かれているにもかかわらず、記述内容と変わらない点に自然の偉大さを体感した」と書



〈図1〉新聞作品一例

んでいる場面がある。夏でも雪が積もっていることに不思議に思い、驚きだけでなく、珍しさも感じているように見える。今でも、富士山は早く冠雪が観測され、春になっても雪が積もっている景色をみることができる。」と記述されていた。このように研修旅行での実体験をふまえることで、授業では取り扱わなかった古典文学作品も含めて、実社会との関わりを見いだし、重層的に理解を深めることにつながった。

新聞の見出しに関しては、5W1Hの要素を含めて考えるように指示したが、「富士山今むかし」のように、漠然としたものが多く散見された。相互評価の結果、もっとも評価の高かった作品は、トップ記事に、古今和歌集の和歌に詠みこまれた富士山の姿と当時の富士山が噴火していたことを書き、サイド記事には、『竹取物語』と富士山との関係、コラム記事は授業で学習した『更級日記』と実際に富士山を訪れてみて感じたことが書かれていた。他学年の生徒に作品を読んでもらうにあたり、時間の都合上、1作品のみとしたため、相互評価の高かった作品を代表とし、改めてトップ記事の見出しについて、5W1Hを組み合わせた見出しを五パターン考えさせた。そして、トップ記事の見出しを抜いた新聞紙面を用意し〈図2〉、古典文学作品を学習し、実際に富士山に行った高校二年生と、新聞で取り上げられた古典文学作品について学習しておらず、富士山にも行っていな

かれていた。一方、『伊勢物語』は九段「東下り」を取り上げ、「主人公の男が東国を旅していると、夏にも関わらず富士山には雪が積もっていることに驚いて、歌を詠



〈図2〉見出しを検討する作品

二年生では「だれ・どこ」を取り入れた「先人がみた富士山」を選んでいるのに対し、高校一年生は「なぜ」を取り入れた「噴火で揺さぶる感情」を多く選んでいた。〈図3〉

投票用紙に書かれていた意見の中では、高校一年生からは「富士山が噴火していたことを知らなかったので『噴火』という言葉があるとよいと思った」というコメントが多く見受けられた。一方で、高校二年生の方からは、富士山の写真を二つ使っているので、「富士山」を見出しに使わなくてもよいのではないかと、という意見もあった。

5パターンの見出しを考えたグループの生徒たちが当初書いていた見出しは「先人がみた富士山」であった。その後、高校一年生からは「噴火で揺さぶる感情」の方がよいとされたことに対して、見出しを熟考した甲斐があったと手ごたえを感じるとともに、伝えたい情報をより吟味することが必要であったと述べていた。



〈図3〉「見出し」の集計結果

い高校一年生を対象に、5パターンある見出しの中で、もっとも良いと思う見出しの選択に違いがあるのか検証するために投票してもらった。その結果、高校二

この探究活動を通じて、新聞の「見出し」によって読者に記事の内容のわかりやすさや伝わりやすさに影響を与えること、見出しを考えるにあたり、記事の中で5W1Hのどの要素が大事かは、実体験の有無にかかわらず核となるキーワードがあり、それを見いだしてつけることが大切だということが明らかとなった。

4. 成果と課題

本実践では、「書く」ことの成果物を「新聞」形式にしたことによって、収集した情報や自身の経験を吟味しながら取捨選択し、他者に伝達できるように意識させることができた。仮に、新聞記事の内容に曖昧な表現があったり伝達したい情報について不足したりしていても、同じ体験や学びをした者同士で新聞を読みあうと、無意識のうちに既知の事柄を補ってしまう。そこで、前提となる知識がない他者（本実践では高校一年生）を読者とする中で、客観的な視点を取り入れることができ、この学習活動を通じて生徒のメタ認知スキルを高めることに直結した。特に、「見出し」に着目したことで、レポートやポスターとは異なり、新聞が社会性・報道性をあわせ持つ「ジャーナリズム」であり、他学年の生徒に新聞を読んでもらうことは、情報の「発信」であることを認識させることにつながった。もっともふさわしいと思う「見出し」について、高校一年生と二年生で結果が分かれたことで、情報の「受け止め」は必ずしも一義的とはいえず、常に多角的な視点を持っておく必要性を実感することができた。同じ事象でも、言葉の選び方によって他者への伝わり方が変わることから、学習者は、数多くある情報の中から吟味し、中心となるキーワードを選び取ることの重要性を体得した。

また、本実践ではICTを用いて文章の編集をさせたことで、教員側からもリアルタイムで生徒の進捗状況の確認が可能となり、各グループに適切なタイミングでアドバイスや添削をすることができた。グループによって抱える課題は異なるため、ICTの特性を生かして個別最適化でき、それ

ぞれにふさわしい指導が行えた。

課題としては、検証に関わった高校一年生には朝学習の時間のみ参加してもらおう程度にとどまったことである。投票用紙に感想を記入してもらったものの、実体験のない生徒が新聞を読むと、どのように情報を受け止め理解するのか、他者の思考について、高校二年生が吟味する学習活動を取り入れれば、メタ認知の力をもっと効果的に伸ばすことができると感じた。他学年の生徒も取り込んだ授業を展開する場合、教科担当者と連携を密に図りながら授業時間の確保を工夫したい。

5. おわりに

協働的な学習活動や対話的な学びの中で、育まれるコミュニケーション力で欠かせないものは、他者を尊重し、様々な価値観が存在することや多様な視点を理解することである。だからこそ、自分の意見や考えを的確に伝えるために、行間を読むといった相手の理解に委ねるような言い回しではなく、言葉を吟味して誤解を生じさせない表現をすることが求められる。本実践での学習活動の展開は、学習指導要領「言語文化」の〔思考力、判断力、表現力等〕A 書くこと「ア 自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にすること」、および「現代の国語」の〔思考力、判断力、表現力等〕A 話すこと・聞くこと「ア 目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討すること」にもつながるといえる。

本実践の探究学習で行ったプロセスは、他教科の学びや他の探究活動にも援用できる。他者に伝えることを意識して、情報を整理・取捨選択し、文章にまとめる学習活動を他の単元だけでなく、他教科との教科横断型授業や総合的な学習の時間の探究活動などでも取り入れていきたい。

*本授業実践を受講した高校2年生が、2022年度「NIE生徒研究発表会」にて発表し優秀研究賞を受賞した。

〔註〕

1) 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議
のまとめ

https://www.mext.go.jp/content/1377021_1_3.pdf (2023年11月30日最終確認)

2) 「ことまど」は、神戸新聞社が開発したデジタル端末向け新聞づくりアプリで複数のデジタル端末から同時に新聞の編集ができる。

<https://kotomado.com/>

探究と対話を深めるNIE

—NIE全国大会京都大会に向けて—

To Make Exploration and Dialogue Deeper in NIE
— Toward the NIE National Convention in Kyoto —

橋本 祥夫
Yoshio HASHIMOTO
(京都文教大学)

1 はじめに

2024年8月1日、2日にNIE全国大会が京都で開催される。筆者はその大会実行委員長を拝命した。NIE全国大会は毎年1000名以上の参加者が見込まれる。京都は人気の場所でもあることから例年より多くの参加者があるのではないかと想定している。

2022年5月に京都府NIEアドバイザーと京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中高連合会の実務者、主管新聞社の京都新聞社の各者による全国大会に向けた幹事会を開催し、全国大会の実施についての確認を行った。

実質的には、2022年4月からNIEアドバイザーと大会事務局で大会の基本構想についての協議を始めた。大会のコンセプトとしては、以下のような意見が出された。

- ・学校（NIE）、地域社会（NIR）、企業（NIB）での新聞活用のすそ野を広げたい。
- ・教員、新聞関係者以外の市民も参加できる大会にしたい。
- ・新聞社として、NIEの授業事例やNIR、NIBも含めた手法の開発、紹介などを工夫していきたい。
- ・紙の新聞そのものを日々活用するNIEの幅も広げつつ、多様な手法を開発、普及するきっかけとしたい。

そこで、公開授業・実践発表のほかに、ハードルが低く、児童・生徒や市民も関わりやすい発表

方法として、「ポスターセッション」部門を新設した。発表者は学校教員に限らず、NIEに取り組んでいる人やこれから取り組もうとしている人、NIEのアイデアや手法を持っている人や団体など、多くの人に門戸を開く。市民グループ、企業、社会教育施設、研究者、あるいはその有志グループなどを想定している。学校の取組であれば、教員だけでなく児童生徒が発表してもかまわない。大会スローガンに関係しているか開催地の「京都」に関係する内容であれば、京都府外からの応募も可能としている。

過去の大会では、公開授業・実践発表で意見交流する時間が限られ、参観者は話を聞くだけで終わっていたことが多い。ポスターセッションは双方向の意見交流が可能となる。参加者にとっては短時間で多くの実践を見て回ることができ、少人数で自由な協議ができる。一方、提案する側としても参加者からの意見をより多く聞くことができる。

公開授業・実践発表の学校については、NIEアドバイザーが分担して、これまでの関わりから公開授業や実践発表をお願いしたい学校に個別に依頼をした。

大会のコンセプトとして、「多様性」がキーワードとして挙げられたこともあり、小学校、中学校、高等学校の校種のバランスとともにできる限り京都府内各地の学校に依頼するようにした。また特別支援学校やインターナショナルスクール、小規模校での実践も入れるようにした。

特別分科会については、地域でのNIEの普及、市民参加のきっかけになるものにしたと考えた。なおかつ「京都市らしさ」をどうしたら出せるのかという観点から協議した。

全国大会では2つの特別分科会を実施する。1つは「京都のNIE史」である。1980年代以降に日本で広まったNIEだが、それに先駆けて京都で行われていた新聞活用教育に着目し、今に生きる内容にする。2つ目は「子ども新聞、子ども記者活動」である。子どもの社会参画のひとつのかたちとして、京都の各地域で広がりつつある「子ども新聞、子ども記者活動」をテーマにする。子ども記者自らが、様々なスタイルの子ども記者活動を紹介し合い、ネットワークを作るきっかけにもする。

大会スローガンは、発表予定校のアンケートも参考にして、教育やメディア、社会の現状や諸課題を踏まえ、「探究と対話を深めるNIE～デジタル・多様性社会の学びに生かす～」となった。

大会実行委員会は2023年5月に設立された。実行委員会は「シンプルで実務的な組織に」という考えのもと、役員は各団体、新聞社の実務者に依頼した。実行委員長はこれまで準備の会にも参加していたNIEアドバイザーでもある京都文教大学の橋本が就任することになった。大会実行委員会の設立総会で、大会スローガンや発表予定校、会場など、基本的な方針が承認された。

大会スローガンである「探究と対話を深めるNIE～デジタル・多様性社会の学びに生かす～」との関連で、どのようなNIE実践が必要となるかを検討したい。

2 NIEでどのような探究ができるのか

学校では、「総合的な学習（探究）の時間」を中心に各教科でも探究学習が盛んにおこなわれている。発表予定校のアンケートでは、探究学習での実践が多く見られた。教育関係者が多く参加することから、これまでの大会スローガンでも教育のトレンドが取り入れられることが多い。そうした点では「探究」というキーワードは外せないと考えた。

令和3年に出された中央教育審議会答『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』（以下、答申）によると「経済協力開発機構（OECD）では子供たちが2030年以降も活躍するために必要な資質・能力について検討を行い、令和元（2019）年5月に“Learning Compass 2030”を発表しているが、この中で子供たちがウェルビーイング（Well-being）を実現していくために自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付けることの重要性が指摘されている。」（答申、p.4）と述べられている。

「主体的・対話的で深い学び」が求められる背景としては、従来型の知識偏重の教育では対応できない時代背景がある。「予測困難な時代」だからこそ、受け身ではなく、自ら主体的に判断し行動できる力が求められている。これまでの学校教育では、そうした力を伸ばすための教育が重視されてきただろうか。これからの時代に求められる資質・能力の育成には学校教育における教育観の転換が求められる。

NIEが学校で実践しにくい要因として、「教科書に載っていないから」という理由が挙げられていた。逆に教科書に載っていれば教えられるという事だ。そのため、日本新聞協会でも教科書や学習指導要領に「新聞」という記述がどれだけあるのかを調査している。しかし「教科書通り」に教えればそれでいいという考え方と求められる資質・能力とは大きな乖離がある。

これから求められる資質・能力として「次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力としては、文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力など」が挙げられた。（答申、p.3）

教科等の「見方・考え方」を働かせるには、「教科書の内容を覚える」に留まらず、そこから自ら考えて意味や意義を考えたり、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を

生み出したりすることが必要である。

そのような学習を展開しようとする時、「教科書に載っていない新聞」という理由で排除されることはない。しかし新聞に、「自ら考えて意味や意義を考えたり、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出したりすること」ができる教材としての価値は求められる。これからのNIE実践は新聞を活用することによってそれが実現することを明らかにしていくことが求められる。

答申では『『予測困難な時代』であり、新型コロナウイルス感染症により一層先行き不透明となる中、私たち一人一人、そして社会全体が、答えのない問いにどう立ち向かうのかが問われている。目の前の事象から解決すべき課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すことなど、正に新学習指導要領で育成を目指す資質・能力が一層強く求められていると言えよう。』（答申、p.4）と述べられている。新聞が「目の前の解決すべき課題」を示してくれるとすれば、教材としての価値は十分にあると言える。

3 NIEでどのような対話が生まれるのか

NIE実践をするうえで常に問われ続けている「なぜ新聞なのか」という点では「新聞による対話」が重要と考えた。情報過多時代の中で、インターネットやSNSで情報があふれ、人々は情報に流されている。スマートフォンの中の個別情報が多い中で、立ち止まって考えたり意見を交流したりする場面は少ない。あえて新聞を使うことで対話が生まれるのではないか。発表予定校の実践内容からも「新聞による対話」が見られると感じた。

答申では、『『協働的な学び』においては、集団の中で個が埋没してしまうことがないように、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげ、子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。『協働的な学び』において、同じ空間で時間

を共にすることで、お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識する必要がある。』（答申、p.18）と述べられている。

授業風景としては、子どもたちが様々な意見を出し合い、交流し合う場面が求められる。多様な意見を尊重し、認め合う中で、新しい解や納得解を生み出すような授業が求められる授業である。大会の公開授業では、そのような授業風景が見られることを期待している。

また答申では、次のようにも述べられている。「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。』（答申、p.15）

対話の対象としては、児童生徒同士の対話、児童生徒と教師との対話があるが、それだけではなく地域の人との対話や過去の先人との対話もある。「あらゆる他者」との交流により、考えが深まり広がっていく。NIEとしては新聞記事の内容を話し合うことを通して、その記事が書かれた背景を熟考し、新聞社やそれを書いた新聞記者との対話と考えることができる。

全国大会では、新聞記事をもとに話し合ったり、新聞記者の意見を聞いたりする実践も発表される。「新聞を活用した対話」とはどのようなものか見ていただきたい。

4 デジタル・多様性社会におけるNIE実践はどうあるべきか

デジタル社会、多様性社会での新聞の果たす役割は何かという問いは、NIEとしてこれまでも問われ続けている。「デジタル・多様性社会の学びに生かす」をサブテーマに入れることで、現代社会におけるNIEの意義を問いかけてたい。

パソコンやスマートフォンが織りなすデジタル社会の中では、自ら探り、問題を解決する能力がより求められる。大会を通じ、新聞を活用して異

なる考え方に触れ、正しい情報を選択する力を子どもたちが見つけ出すきっかけにしてもらおうと考えている。また、近年の教育界の状況を踏まえ、ジェンダーなどの課題を取り入れ、多様性社会に向けた教育について見つめる機会も設ける予定となっている。

また子どもたちも多様化している。答申では、「学校は、全ての子どもたちが安心して楽しく通える魅力ある環境であることや、これまで以上に福祉的な役割や子どもたちの居場所としての機能を担うことが求められている。家庭の社会的背景や、障害の状態や特性及び心身の発達の段階、学習や生活の基盤となる日本語の能力、一人一人のキャリア形成など、子供の発達や学習を取り巻く個別の教育的ニーズを把握し、様々な課題を乗り越え、一人一人の可能性を伸ばしていくことが課題となっている。」(答申, p.10) と述べられている。大会の発表校には特別支援学校やインターナショナルスクールが含まれている。NIEは多様な教育活動ができるのが大きな特徴である。特別支援教育やグローバル教育としてのNIEの可能性も探っていきたい。

またデジタル社会の中で、ICT教育が重視されている。ICTの活用の意義として、答申では以下のように述べられている。

「子供がICTを日常的に活用することにより、自ら見通しを立てたり、学習の状況を把握し、新たな学習方法を見いだしたり、自ら学び直しや発展的な学習を行いやすくなったりする等の効果が生まれることが期待される。」(答申, p.18)

「ICTの活用により、子供一人一人が自分のペースを大事にしながら共同で作成・編集等を行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動など、『協働的な学び』もまた発展させることができる。」(答申, p.19)

「児童生徒自身による端末の自由な発想での活用を『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善に生かすこと、学びと社会をつなげることにより『社会に開かれた教育課程』を実現すること、プログラミング的思考、情報モラル等に関する資質・能力も含む情報活用能力を教科等横断

的に育成すること」(答申, p.26)

「ICTが必要不可欠なツールであるということは、社会構造の変化に対応した教育の質の向上という文脈に位置付けられる。すなわち、子供たちの多様化が進む中で、個別最適な学びを実現する必要があること、情報化が加速度的に進むSociety5.0時代に向けて、情報活用能力など学習の基盤となる資質・能力を育む必要があること」(答申, p.30)

新聞の購読数が減少するのに伴い、各新聞社はデジタル化に力を入れている。前回の愛媛大会の大会スローガンは「ICTでひらくNIE新時代」だった。デジタル新聞によるNIE実践が増えてきている。

新聞の活用として「紙かデジタルか」ということも議論の対象になることがあるが、それは重要なことではない。答申でも「一斉授業か個別学習か、履修主義か修得主義か、デジタルかアナログか、遠隔・オンラインか対面・オフラインかといった、いわゆる『二項対立』の陥穽に陥らないことに留意すべきである。どちらかだけを選ぶのではなく、教育の質の向上のために、発達の段階や学習場面等により、どちらの良さも適切に組み合わせて生かしていくという考え方に立つべきである。」(答申, p.23) と述べられている。NIEも全く同様のことが言える。

さらに答申では、「学校におけるICT環境の整備とその全面的な活用は、長年培われてきた学校の組織文化にも大きな影響を与え得るものである。例えば、紙という媒体の利点や必要性は失われな一方、デジタルを利用する割合は増えていくであろうし、学校図書館における図書等の既存の学校資源の活用や充実を含む環境整備の在り方、校務の在り方や保護者や地域との連携の在り方、さらには教師に求められる資質・能力も変わっていくものと考えられる。その中で、Society5.0時代にふさわしい学校を実現していくことが求められる。」(答申, p.31)

NIEでも、今までにはないデジタルならではのNIE実践が出てくるだろう。大会では、デジタル・多様性社会に対応したNIEについても議論を深め

たい。

5 おわりに

NIE全国大会は、開催地にとって一大イベントである。大会をきっかけに、開催地のNIEの裾野をさらに広げ、NIE実践が活性化するようにしたい。同時に「NIEはどうあるべきか」を問い直す機会でもある。「とりあえず新聞ありき」ではなく、新聞の価値を問い直し、教育効果があると認められることに焦点化して実践をすることが重要である。全国から参会される方々と、新聞の可能性、NIEの可能性について議論を深めていきたい。

参考・引用文献

- ・中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）令和3年1月26日https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（最終閲覧日：令和6年3月12日）

『N I E フォーラム』の編集規定、投稿・執筆要領

『N I E フォーラム』の編集規定

1. (発行について) 本誌は、日本N I E学会の機関誌であり、年一回、デジタル版で発行する。
2. (本誌について) 本誌は、本学会の目的に資するよう、会員の研究と実践に関する報告と記録の発表にあてる。論文の発表部門として、研究部門及び実践部門の二つを設ける。また、各部門は、報告と記録で構成し、投稿者が申告する。なお、その他に、日本N I E学会の委員会の活動成果報告を掲載することができる。
3. (投稿執筆規定について) 報告と記録の投稿・執筆は、別途所定の要領による。
4. (報告と記録の掲載の可否について) 報告と記録については、機関誌編集委員会の「年報発行部会」での審議を経て掲載の採否を決定する。これらは『日本N I E学会誌』とは異なり、「査読なし」扱いとする。
5. (掲載の可否を判断する審議の形態について) 機関誌発行委員会の「年報発行部会」は、掲載予定原稿について執筆者との協議を通じ、内容の変更を求めることができる。
6. (編集における費用負担について) 図表等の編集について、特に費用を要するものは、執筆者の負担とする。別刷りにしても、執筆者の負担とする。
7. (原稿の校正について) 報告や記録の校正については、初校は執筆者がおこなうものとする。その際、内容の加筆・修正は最小限にとどめること。なお、再校は機関誌発行委員会「年報発行部会」で行う
8. (投稿した原稿の扱いについて) 本誌に投稿した報告や記録は、原則として返却しない。

付記：本規定は、令和4年4月1日から発効する。

『N I E フォーラム』の投稿・執筆要領

1. 報告や記録は、未公開のものに限る。ただし、口頭発表、プリントの場合は、この限りではない。応募する報告や記録は、同一の表題の場合は2回まで連続投稿を認める。
2. 報告や記録の投稿締め切りは、毎年8月31日(必着)とする。
3. 報告や記録は、パソコンまたはワープロで作成されたものに限る。論文の長さについては、研究報告及び実践報告にあっては本誌のページ数で6～8ページ(図表等を含む)とする。実践記録又は研究記録にあっては本誌のページ数で3～4ページとする。本誌の1ページの体裁は、A4判、横書き、横22字×縦41行の2段組で、使用する活字は10.5ポイントとする。註や参考文献の項目を書く場合も、使用する活字は10.5ポイントとする。上下左右25mmの余白を設け、図表等については余白の枠内に収める。
4. 報告や記録の第1ページには、表題、著者名、所属を記入し、本文は10行目から書き始める。なお、表題と著者名については、英文(欧文)表記を添付すること。
5. 報告や記録は、機関誌発行委員会宛に3部(コピー可)提出する。投稿に際しては、研究部門、実践部門のどちらに投稿するかを明記すること。併せて、著者名、所属、使用したパソコン・ワープロ使用機種ならびにソフト名を付記した、報告や記録のデータが入ったCD-R又はUSBを提出する。ただし、メールへの添付による提出も認める。画像のある場合は、印刷時の字体統一のために、必ず元データを別途に添付すること。
6. 原稿は、下記宛に送付すること。

〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町1-1
 福岡教育大学 教職実践ユニット 小田泰司 宛
 yasuoda@fukuoka-edu.ac.jp

付記：本要領は、令和4年4月1日から発効する。

NIEフォーラム 2023 第2号

編集者：日本NIE学会 機関誌編集委員会

橋本祥夫

小田泰司

鴛原 進

発行日：2023年12月31日

NIE FORUM

NEWSPAPER IN EDUCATION

2023 No.2

CONTENTS

Practice Reports

- Practicing NIE through Cooperation between Schools, Administration, and
Newspaper Company
— Focusing on “Betsukai Town Newspaper Day” in Hokkaido—
..... Yasuhiro IKEDA, Rie NAKAI 1
- Practical Record of Newspaper Headlining with an Awareness of
Communicating with Others
..... Yukiko IBUKI 9
- To Make Exploration and Dialogue Deeper in NIE
— Toward the NIE National Convention in Kyoto—
..... Yoshio HASHIMOTO 15